

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

最終報告書提出日 2011年9月22日

**基本情報**

加藤有子、現代文芸論

平成22年度冬学期・個人派遣（PD・助教枠）

**研究課題**

ブルーノ・シュルツの初期絵画作品（蔵書票、アルファベット）の調査と分析——エンブレム、マニエリスム、書物

**派遣先での活動**

(1) 派遣先の基本情報

【派遣国】 ポーランド

【都市】 クラクフ、ワルシャワ、ウーチ

【研究機関名】

- ・ ヤギェウォ大学図書館（クラクフ）
- ・ クラクフ国立博物館（クラクフ）
- ・ クラクフ公立図書館（クラクフ）
- ・ ワルシャワ国立図書館（ワルシャワ）
- ・ ワルシャワ大学図書館（ワルシャワ）
- ・ ウーチ大学教授、ズビグニェフ・マシエフスキ教授個人コレクション（ウーチ）

【コンタクトをとった主な研究者】

- ・ カタジーナ・バザルニク博士（ヤギェウォ大学英文学科専任講師）
- ・ ズビグニェフ・マシエフスキ教授（ウーチ大学英米文学科教授）
- ・ ゼノン・ファイフェル氏（クラクフ、詩人、文学理論）
- ・ ヤン・ゴンドーヴィチ氏（ワルシャワ、文芸評論家、翻訳家）ほか

(2) 派遣期間

2011年7月14日～2011年9月11日（60日間）

**主な研究成果**

(1) 当初の計画の概要

ブルーノ・シュルツの初期絵画作品のうち、個人所蔵のためこれまで一般に未公開だったいくつかの作品を実見、分析することが今回の渡航の主たる目的だった。これらは蔵書票と蔵書カタログのためのイメージによるアルファベットであり、イメージ、テキスト、書物の関わりに極めて意識的かつ戦略的だったシュルツの創作を考えるうえで重要なものである。関連資料を収集、調査するほか、専門家と研究上の意見交換も行う。

(2) 実際に達成された成果

ウチ大マシェフスキ教授の個人コレクションを見せていただき、これまで詳細がほとんど不明であったシュルツ作のアルファベットをかたどったイメージ付き蔵書カタログのほか、オリジナルの蔵書票、ドローイングを数点調査することができた。同氏のコレクションはシュルツ研究者の先駆者である故イエジ・フィツォフスキ氏以降は、これまでシュルツ研究者がアクセスできていなかったものであり、大変貴重な機会となった。なかでもシュルツが友人のために作った蔵書カタログは、筆者が博論で提示したシュルツ特有の〈書物〉というコンセプト、すなわちイメージとテキストを統合する場として、そしてイメージ／テキスト、文学／美術という領域分けを越える第三のジャンルとしての〈書物〉というコンセプトをめぐる議論を裏付ける材料となるものであり、その点でも非常に大きな意味を持つ調査となった。

クラクフ、ワルシャワの各図書館では、ポーランドの蔵書票やバロック期のエンブレムと美術に関する資料のほか、シュルツをはじめとする両大戦間期美術、文学、ガリツィア研究の最新資料を集め、両大戦間期に刊行された新聞、雑誌のマイクロ資料を閲覧した。

資料面のみならず、ポーランド文学、美術を専門とする若手からベテランまでの研究者たちと日々意見を交わす環境にあった二か月は、学問的な刺激に満ちたものだった。マシェフスキ教授夫妻のほか、シュルツの美術作品についての数少ない専門家であるヤン・ゴンドーヴィチ氏、さらに、新しい文学ジャンル〈リベラトゥラ〉を提唱するカタジーナ・バザルニク氏、ゼノン・ファイフェル氏ほか、同世代の若手研究者との議論は新しい対象、資料に目を開かせてくれ、研究の次の展開を考えるヒントを多々与えてくれた。

バザルニク、ファイフェル両氏は、ページ空間や挿絵など、書物の物質的要素とテキストが分かちがたく結びついた文学を〈リベラトゥラ〉と名付け、同コンセプトに合致する各国語の作品をポーランド語訳してシリーズとして刊行している。両氏との何気ない会話から、今年の冬に来日し、東京大学で特別講演をしていただけることも決まった。

今回の研究滞在によって得た成果は、現在出版準備中のシュルツに関する博士論文およびガリツィアをめぐる論文に反映させる予定である。

### (3) 今後の研究展望

準備中のシュルツに関するモノグラフィは、シュルツ作品の生成プロセスと制作原理に焦点を置くものである。今回調査したマシェフスキ氏のコレクションは、ここで論じた内容を裏付ける材料を提供してくれた。これらおよび最新の研究、考察をこのモノグラフィに反映させることが短期的目標となる。

また、今回はポーランドにおける書物史の資料も集めた。これを使ってシュルツの〈書物〉というコンセプトをより広い文脈で考察していく。〈リベラトゥラ〉という概念を提唱するバザルニク、ファイフェル氏とも研究上の協力を進めていきたい。シュルツ論の新たなトピックとしてはシュルツとマニエリスム、についても今後考えていくつもりだ。

長期的には、戦間期ガリツィアの画家であり作家であったシュルツの作品研究を端緒に、「中欧」再編の流れにあっても完全に忘却されているガリツィア文化圏を 20 世紀初頭の中・東欧ヨーロッパのモダニズムに再布置するという、より大きな研究に展開していきたい。

\*

最後に、このような貴重な研究滞在の機会を与えてくださった派遣プログラムの先生方、事務局の方々、また二か月の不在になるにも関わらず、快く送り出してくださった所属研究室のスタッフに感謝申し上げます。